

助産婦として，母として

倉敷成人病センター南くらしき病院周産期センター

岸本長代

助産婦学校の同級生，ラータこと平田友子さんよりバトンタッチ致しました。本当に厳しかった助産婦学校時代を無事終了できたのは，ラータをはじめとする仲間たちのおかげだと思っています。もちろん恩師の先生方にも感謝の思いでいっぱいです。また，現在の私があるのは，職場の先輩方や仲間たち，そして家族のおかげだと思っています。その方たちに，「ありがとう」の気持ちを込めて書いてみたいと思います。

大好きな母，姉，弟

私は，母が大好きでした。生き方や考え方がとても好きでした。私が26歳のときに他界しましたが，それまでいろいろなことをおしゃべりしました。父との恋愛話も聞きました。中絶したことや，私たち姉妹を出産したときのこと，祖父母のこと，父の死やその後のことなどなど，まるで友達とおしゃべりしているかのように。私の仕事のこともよく聞いてもらいました。そんなときは気持ちがいつも軽くなったように思います。

「勉強はできなくてもいい，社会に役立つ人間になりなさい」「家の中はいつも明るくないといけない，笑いの絶えない家を作りなさい」小さいときからよく聞かされた言葉です。家事はいついかなにも教えてもらわなかったけれど(だからいまだに苦労しているのだが……)，このことは，私の中でずっと生かしていきたいと思っています。

2歳上に姉がいます。美容師をしています，女性として，仕事をしているものとして，あるいは妻として，母として，いろいろなおしゃべりの

中で教えられるものがあります。職場の人間関係で悩んでいたとき，姉がこう言いました。「桃太郎の鬼退治の話知ってる？ 桃太郎ひとりでは鬼退治はできなかった。犬，猿，キジがいたから，みんながそれぞれの力を出したから鬼退治ができた。職場も同じ。みんなそれぞれ役割がある。ひとりひとりの良さがあるでしょう。」とてもありがたい言葉でした。

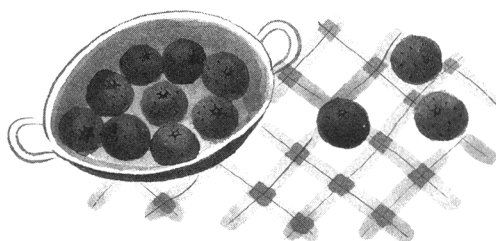
中学2年の春，義弟が生まれました。かわいくてかわいくてしょうがない，そんな感じでした。体の弱かった母を手伝って，よく面倒をみたと思います。私が母性に興味を持つのに，彼は小さな体をはって大きく貢献したようです。

大好きな仲間たち

助産婦学校で出会った仲間たちは，私の大切な宝物のひとつです。それぞれが個性的で，でもとてもやさしくて，随分支えられたように思います。8畳一間に3人という寮生活は，私にとってはとても楽しいものでした。

卒業してはじめての同窓会で，恩師に言われた言葉です。「3年目の助産婦が一番生意気だ。なんでも自分ひとりでできると思っとる」。キャヒン，やられたー。また一からのスタートです。

私は会陰保護が下手でした(今もそんなにうまいとは思っていませんが)。「助産婦学校に帰れ！」とまである医師に言われました(よっぽど下手くそだったのでしょう)。涙がチョチョ切れしました。分娩介助がとても怖くて，もうお産はしたくない……，浮上できないほど落ち込んでいました。そ



んなとき「助産婦の仕事って、助産だけじゃないじゃない」と友人の一言。ありがたかった……。産婦自身をしっかり受け止め、私に取り上げてもらってよかった、と思ってもらえるような人間関係を作ること、そんな基本に帰ることができました。一生のうち数回しかないお産にかかわれることの重みを忘れず、お母さん、赤ちゃん、そしてちょっと張り詰めているお父さんと、大切な時間とともに過ごして行きたいと思います。「女のしもは一生もんじゃ」その医師の言わんとしたこともよくわかるようになりました。

大好きな夫、そして子供たち

母がよく言っていました。いつになってもいい、どこのだれでもいいから一度は結婚した方がいい、女に生まれたからには、一度は子供を産んでみるべきだ、と。私にもそのチャンスがやって来ました。夫と出会えたことは、一生のうちでそうそうないラッキーなことだったと思います(彼にとってはアンラッキーだったかもしれないが)。

長男を妊娠したときは飛び上がって喜んだものです。2回目のときは、まーそうじゃろう、でした。この差には自分でも驚きでした。体験学習に勝るものはないとつくづく思います。

長男のときは、すべてが初体験で、喜んだり驚いたり納得したりと、多くのことを学びました。24時間の陣痛を夫とともに過ごしました。回旋異常もあり分娩進行しないため帝王切開に切り変わりましたが、その時のなんとも言えない思い、夫の複雑そうな顔、涙がこぼれ落ちたこと、今でも

忘れられないシーンです。長男は超巨大児で、手術室が笑いどよめきに包まれたのを覚えています。「おまえは、時間外のカイザーじゃった、下からよう産まんかった」と、いまだに言われます。

2回目のときは、まーそうじゃろう、のスタートでしたが、今度は経膈分娩を、と意気込んで臨みました。でもその夢はかないものでした。双子ということで、切迫流産、頸管縫縮術、満期産までもたせられるだろうか、職場に迷惑をかけてしまう、長男のときとはまったく違う体験や思いでした。36週で生まれたチビたち(私は便宜上そう表現しています)は、決してチビではなく、長男にも勝る発育を遂げています。ただ女の子の母になれなかったことだけが残念で、人生思うようにならないな、とつくづく思います。

3人の男の子は、それぞれに毎日私たちの感情をもり立ててくれます。“親育ち”のチャンスを、十二分に与えてくれているようです。素直に受け止めて、ともに育って行きたいものです。

私の人生に子供たちが加わり、ますます助産婦の仕事が好きになりました。好きな仕事が続けられる、とてもありがたいことです。それというのも、主人の理解と協力があってのことだと思えます(もっと大切にしないで……)。

「かあさんのところに生まれてきてくれて、ありがとう」(読売新聞社『日本一かわいいわが子の誕生に贈ることば』の中の、阪神大震災で1歳の長男を亡くされた方の作品です)そんな想いをいつも心に、助産婦として母として、生きていきたいと思っています。